

光明 第三卷第六号

忙中閑

閑ひまの味わい

忙しい。忙しい。子供の成績物も見ねばならぬ。明日の授業の支度もせねばならぬ。本屋から来た本もまだ手に取らないのがある。手紙の返事を書かねばならぬ。原稿のメ切も近づいた。忙しい。忙しいは祝福された人間に与えられた食物なのだ。「忙しいは堪へば堪ふべし。忙しいは働く幸なり、忙しいは。」

閑。閑の味わい。それは忙しさを味わう人へのみ味わわれる。目の回る様な忙しさ、身体からだの二つ欲しいような忙しさの間にある閑、それがほんとの閑である。朝から寝ておられるようなそんな空時間は、人間の味わうほんとの閑ではない。

あなたは閑でしょう。けれどそのあなたの閑は、千金の値ある閑ですか。喉の渴いた時、清水を掬むような閑ですか。味のある閑ですか。あなたが言う閑が仕事のないということの意味するならば、あなたは、生を貪あっているのです。あなたの周囲には無数に人の手を待っているものがあります。あなたは取って、それをあなたの二十四時間の中身にしますか、人に渡しますか。

忙しい者の目

あなたは忙しいでしょう。けれども、あなたあなたのしている仕事しごとがたと貯えられていることはあなたの忙しいことの証明にはなりません。それは忙しいのではなくて怠惰です。おうちやくです。怠者は吐息をつき、忙しい者の眼は輝きらいています。

病むために

もう三十日も薬がはなれない。昨日は鼻の両側が痛んで夜十二時まで眠られず、湯を沸かして温めたので、今日はたいそう気分がよい。ペンが走る。頭が走る。頭が早く、ペンが遅い。今日一日、夜を徹してでも書き続ける。昨日の夕方、泉のように湧いて出る想いを、痛みのためにペンを捨てて寝間に入った。病気はいいものではない。けれど病気して初めて健康の味が知られる。僕は病の日が多いけれども、病気のために床につくことはない。忙しさのためには病気すら忘れ得る。強つよそうで弱い私、弱よわそうで強い私。河馬のように強つよかったら、今の私ではなかったかも知れない。病気をするが故に、病む人のために泣き得られる。

涙の後

私の走り書きの日誌の中に、何の中にあつたのか、次のように書いてある。「オスカーワイルドがその名誉も信用も失い、妻には去られ、最愛の子まで奪われた時、彼の心にみなぎつたものはただ謙遜の感謝だけで、その中に新しい天地が開け、今まで敵であつた靈は彼の味方となつたのである」と。

人間がすべてを失った時、すべてから突き放された時、涙の幾日は続くだろう。そして泣く涙もなくなつた時、ああこれが人生かと微笑した時、そこには偉大なる光明さす世界への扉が見えて来る。そして今まで私を苦しめた霊が、私の味方であることが知られる。そして、善悪を超越した光明の世界に導かれる。残るものは、謙讓な感謝のみである。

信ずるが故に

「吾は信ずるが故に語る」と。狂風ばくは何も知らない。知つた人は満ちている。私は知つたのでは飽きたらない。生命論を何冊読んでも、何べん読んでも、私たちに靈感はない。感謝は湧かぬ。吾は信ずる！ 何という力強さだ。人間は知るが故に偉大なのではない。信ずるが故に偉大なのである。「吾は信ずるが故に語る。」もう一度「吾は信ずるが故に語る。」知識は概念である。物の見方である。言葉で言えよう。文字で書かれよう。信仰は言葉でもない。文字でもない。ましてあの不完全な経文でもない。ただ私の全体、私の生命全体が私を私として、神秘を神秘として生かすのである。

親の元に復れ

「先生！ 先生！ 御許し下さいませ。今まではよくよく眠っていました。あれほど先生が「目覚めよ」と叫んで下さいませしても、少しも聞かずに、幾度先生を攻撃したかわかりません。そのみでなく、毎月の「光明」すら手にしない月が大抵で御座いました。それをも先生はお怒りなく、愛しよう、指導しよう、の御心でお出で下さいましたことが、三年後の今日、漸くわかりました。日が覚めました。

私は何という馬鹿者でございましたでしょう。どうかお許し下さいませ。どうかお許し下さいませ。私は何という幸福者でございましょうか。今までは信仰とか死とか、真実とか、そんなものは眼中になく、ただ毎日の楽しみばかり追いまわして一日一日をあさはかに送っていました。何という恐しいことでしたでしょう。

……中略…… ああ、今は偉大な何ものかを授かつたような、何と言つてよいか分らない程、毎日くうれしくて、感謝のみで日送りさして戴きます。思い返せば先生はちようど私のような悪人、目覚めぬ人が、無意味な日を送っている者の可愛さを早くから感ぜられて、救済して下さいました事が分りました。ああ、有難うございました。先生が愛の力であれほどまでに叫んで下さいませんでしたら、人生五十年も、欲の戦いで浮世三分五厘と、彼の人が悪い、この人がよいとばかりで世を送るのでしたものを、先生の愛の力でゆりおこされました。私のこの幸福は、如何なる金銀財宝で買い求めようと思つても買い求める事は出来ません。

……中略……どうかお許し下さいませ。さぞさぞお苦しいございましたこととございませう。ああ、愛の力、愛の力ほど恐しいものはございませぬ。悪魔の角を折りつつ何時の間にか感謝して行くようになります。愛の力の恐しいことが身にしみました。私もこれからこの感謝と愛を持って人類の救済に立ちます。……」

忙中の閑、私は熱い涙にむせびます。すべての子よ、親の元にかえれ。そこには呪われても呪い得ない親の愛がある。あなたはまだ見ない親、永遠の親の元にかえったのだ。私のもとにかえると共に。

狂風は健在なり

雨も降ります。風も吹きます。病になろうが、床につこうが、常に私は健在です。卑怯な犬が鳴きついたり、飼い犬に手をかまれたり、世間並のことはありますけれど、私は常に健在です。如何なる時も感謝しています。忙しきの内に。努力の内に。

全てを赦せ

人間よ、免しあえ。牙をむき、眼を怒らせて、血眼になつて、智慧の全てを使つて肉をさき、血をすすつて暮しているのが人生のほんとうだろうか。水の涸れた沙漠に木は茂らない。愛の泉の涸れた人間に、人間味はわからない。あなたはあなたの愛が涸れていることに気づかないか。今の様に不自然な利欲の世界に飽きのこない間、息づまる虚偽の生活に眼のつかない内は、あなたの愛の涸れていることに気づかないのだ。目覚めて下さい。目覚めて下さい。ただ簡単です。目覚めて下さい。私は今泣いています。目覚めて下さい。

全てをゆるせ

赦せ。赦せ。悪人も、罪人も、愛、全てを赦す強い愛の前には救われる。赦すことは全ての者の開放である。赦す涙の中には善悪はない。赦せ、赦せ、無条件に赦せ。赦した者も、赦された者も、赦された愛、赦した愛でのみ救われるだろう。

「互に呪いあい、争いあつた二人でも、私たち二人は何という悪縁でしょうと、手を取つて泣いたらお互に赦されると思います」。

そうだ。長くもない一生涯に、血眼になつて争うとは何という不幸だろうと、敵と敵が手をとつたら赦されぬこともありませんまい。赦すことは我を捨てるのである。我を棄てて、より大きな自分を生かすのである。責める心には明らかに自分の小さい醜い殻がある。その殻を棄てて赦す心は、私の心を開いて、大きな自分と抱き合うのである。赦す心の中の中にのみ、悪人も罪人も入られる温かさがある。氷のように冷たく監獄のように厳しく、自分を固めて睨み合っている者は、一方が赦さない以上、永遠に呪いを解かずに迷うだろう。もし私たちが苦しむなら、赦し得ない、全てを赦さない自分の心を抱いて泣こう。

天下の師範生よ。教育者よ

教育者諸君よ。師範生諸君よ。ルソーが「自然に帰れ」と言つてから、ペスタロッチが病める親なき子を育ててから、世界の幼き者は、自由の天地に引き出されました。私たちは、前途に栄光輝く幼き者の友として、彼等を無限の広野に導く人とし

て、生きていることは何という幸福でしょう。我が身にヒシヒシと迫って来る無言の靈感は歡喜よりもむしろ恐れです。

大自然は恵みです。めぐみ（萌）です。温い春の光のみ、草木を萌せます。児童を自然に復せ。それは彼等を教育者本位の型から出して、彼等を自由な温い愛の園に復らすのであります。彼等のあの天真な創造性を傷つけないで育て得る力は愛に目覚めた私のみです。冷たい監督の目、骨を刺すような怒りの言葉、彼等を去勢して、人形にして、私の統べくくりをつけた満足に甘んじている間、彼等幼き者は呪われています。

朝の空気は清らかです。信仰の感謝に胸の高鳴る私が、五十五名の幼き者の前に立つた時、「全ては赦されてある」と彼等の健かな顔をながめた時、そこに悪人がいるでしょうか。「全ては赦されてある」その私の愛のみが、彼等の真実の友であり導きであり得る資格です。やかましい規則の前にこそ善い子供もいます。全てが赦されたその前には可憐な一個の生命が、自由に大きに育っています。ひねくれた心も卑怯な心も、赦される愛の前にのみ開かれて来る。

さあさあ本気でと、それぞれの幼い生命が努力している時、何で鬼の目で睨めつけられよう。荒さみきつた冷たい教師の前に墓場が現れ、全てを赦す愛の泉の流れつぎない教師の前には、天の樂園そのままの光明世界が現れる。

一人の人間が悪を犯した時、嚴重な裁判の前には、彼の心は恐れと、悔恨と、罰に震いおののくばかりであった。彼が全てを赦された時、彼には奮励と感激とそして涙の外に何があつたらうか。全ての教育者よ、幼き者の全てを赦せ。赦す涙のその中に一切の方法は生れて来る。

弱い者は赦し得ない

赦すとは、私が心に病んで卑怯にも言い得ないのではない。強い私の全体が、呪う私から救われて、強い強い私の生命の平和を保つのだ。弱い女の口と強い男の口、どちらが激しい霜のような言葉を出すだろう。硬教育もいい、打つのもいい。けれどもそのあげられた鞭の内には、温かい涙がなければならぬ。裏町の貧民窟を通る時、私を苦しめるものはあの罵り叫ぶ女の声である。赦されることのない彼等の子供は永遠に浮かばれない。

赦す者は強い。強い者のみが赦し得る。あなたは何も報酬を考えないで、全てを赦せ。彼はまだ目覚めない。彼は不幸なのだ。赦し得るあなたは目覚めない彼よりも幸せである。

自己の責任に敏感なれ

責任のないところ即ち暗黒世界

世の中が進んで、色々な職業が出来、色々な社会が現れて来まして生活が複雑になつて来ますと、如何なる人も捨所がなく、その才幹、その学力によって皆働ける立

場を与えられます。そして如何なる人が如何なる仕事をしようと、そこにはきつとその人へのみ与えられる自由の天地があります。今日のように世の中が分業的になつて来ますと、各々の人には、その人自身の能力を自由に働かす自由な天地を社会から委せられます。そしてその委せられた天地は社会から孤立したものではなくて、社会という有機体の一部でありますから、私たちが受け持たねばならぬ部分は、それが社会全体に関係をもつています。ですから、社会に対する責任は、社会を作っている全体の人が皆で責任をもたねばなりません。軍艦一隻に数百人の兵士が乗り組んでいて戦争する時、砲を発射する一水兵が怠けていることは、他の数百人がしている仕事全体の価値を少くすることになります。世の中に法律を守らない人間が一人もないなら、あの監獄などいらぬことです。悪い人一人が苦しむばかりでなく、善良な国民が皆で租税を出して、彼等のしたことこの責任を負わなければならぬ。

私たちがしていることは、善いことにしても、悪いことにしても、私のしたことの結果は皆社会に影響を及ぼすのですから。一体に国民はもつともつと、自分の職業や、自分のしていることに対して、重い責任を感じて欲しいと思います。各々の人が責任を感じるこの深い社会は、人間の第一の欲求たる自由の尊ばれる社会であります。自由の尊ばれる社会は光明の輝く広い温い無限に発達性をもつたほんとの人間世界であります。

自由を尊べ

国民全体がもつともつと自由を尊ぶという精神が出来なければ、お互に立派な社会に住むことは出来ないと思います。自分の責任を軽んずることはすぐ、他人の自由を尊ばないことになり、自分の自由を軽んずる精神はすぐ他人の自由を軽んずる精神であります。私自身の自由は、私自身が尊重して行くと同時に他人の自由も尊重しなければなりません。自分のしたことがよい結果を生んだ時、それを自分の功にしようということを考えるのは人間の常でありますけれども、私たちが目覚めんとする人たちは自分のしたことが悪い結果を生んだ時、それを他人に転嫁しようとする様なことではなりません。私たちの自由意志でした以上は、善い結果だろうが、悪い結果だろうが、いやしくも自分のしたことである以上、その責任は全部自分が負つて行くということにしなければならぬと思います。したがって、私たちのしたことは私が責任を負う以上、そのことを実行するについては、自分の自由意志によつて実行することが大切です。自分の意志が尊重されないで他人の意志で働いて行つて、その事について責任を負わないならば、社会には永遠に真の道德というものほ存在しないと思いません。

離婚国

一世一代の大事である結婚でも大分進んで来たとは言え、世界一の離婚国であるという事実は如何にいい加減な無責任な結婚が行われているかということの証明だと思えます。父兄たちは、自分の意志本意で子女の結婚を取りきめるし、子女たちも自分の意志よりも、父や兄の意見本位で、お父さんさえよければ、というので他人事の

ように定められて、行つて見て良ければいるし、良くなければすぐ帰つて来る位の氣で、こんな大事が行われます。酷いになると、本人は全く不賛成であつても、無理に行かされてしまうのです。それで行くのが嫌などと言おうものなち、すぐ親不孝だとか、勝手我がままだとか言つて、人情づくめで行かされるのです。こんな具合だから一度嫁入つて再び帰つて来ることなんか、隣からかえつて来るくらいの氣らしく見えます。今の日本で恋愛結婚万能論を唱えることは如何だろうかと思ひますけれども、少くとも結婚する本人たちに、もつともつと自由と責任とを与えて、もつと慎重な態度で結婚をとり行いたいと思ひます。

アメリカに行つてゐる人と、日本にいる女子との間にまだ写真結婚が行われていた頃、高等教育を受けた婦人が、教育も収入も相等な人というので、一枚の写真をたよりに渡米して見ると、案に違つて教育も何もない年とつた老人だったので、泣いて悲しんだけれど仕方なく一緒に床屋を開業したが、二人の病氣の時、夫は講談本を読んでいるし、妻は新しい女の雑誌「青踏」を読んでいたとか。在米日本人が写真結婚なんか自分で止めてしまったのは賢いやり方だと思ひます。どうしたつて、四十にもなつた男に十七八の若い女を嫁すなんか、あたりまえのやりかたではない。どうして、ギツシリした夫婦の愛の生活なんかが出来ましようぞ。写真結婚でなくとも、男が講談本に妻が新しい雑誌を読んてる位の結婚は方々にありますからね。どうしてそんなことで円満な家庭が作られますか。男より妻の学力が劣つてゐるのは普通ですが、これとて男子が今までの様に女の人格を見とめないでほんの男の道具位に考へており、妻もそれに甘んじてゐることで満足出来ればいいが、もつともつと結婚生活によつて、人間の能率はたらきを高めて行かうと思へば妻たる者にも夫に匹敵する位の学力が必要だと思ひます。

とにかく今の様に責任の敏感性を欠いだ結婚が行われている間、幾多の悲劇が出来ることは止むを得ないと思ひます。

子を持つ親に

三月にあげず夫婦喧嘩を子供の前で見せるような、子供の教育に対して敏感性を欠いでゐるような夫婦の間には、どうしたつて立派な子供が出来るものではありません。湿っぽい陰気な家庭には、のびのびした子供が生まれたにしても、親たちの無責任のためにその子供は持つて生れたいい芽が摘まれて行つて、低能な子供になつてしまわなければなりません。子供には止めておきながら自分は道の中の立小便と言つたような、全く責任の敏感性を欠いだ家庭教育は、ただに子供の教育に一文の価値もないばかりでなく、かえつて濁りのない純真な子供たちの眞実性を鈍らすものであります。

実業界などでは、酒と女に金を使わない者は人ではないらしい。私は信仰に入つた野依秀一氏の懺悔を読んでおどろきました。あの恐しい梅毒などに罹つて、自分の妻に伝染させ、生れて来た子供にまで關係を及ぼして、不具や白痴を生むなんて、そんな恐しい罪がどこにありますか。そんな親の因果を子が着たのです。そんな子を生んだ親は自分の不品行に対して慚死してもいいくらいです。

一体に将来の親は、何の考えなしに無責任に子供を生んで、いい加減な人間を社会に出すということは、考えねばなりません。子供が生れたら子供の時から一定の積立金位は月々してやつて、将来の教育位は責任を持つてして行く考えでないかと、とても立派な人間として自分の子供を社会に役立たせることは出来ないと思います。特に悪いことをしても平気なような、道徳に対して感じの無い子供を作ることには、他日きつと社会に害毒を流すもとであつて、こんな大きな罪悪はないと思います。よく子供の時になかなか悪い位なのを見て、子供の時から人間好しではなどと聞くことがあります。もつての外の心得違いで、すぐ大きくなれば親たちすら平気で苦しめる種を播くのであります。とにかく、一切人の親たるものは、もつともつと、子供に対して敏感でなくては、社会の進歩は出来ないと思います。

当然出席すべき会合に無届で欠席する位は平気で行われています。いやしくも自分という者をもつと尊い者に感じて自分をはつきり考えているなら、当然自分として出ていなければならぬ場所に出ていないことは、自分を自分で辱しめるものであります。止むを得ないならば、きつと自分で出ない理由位は言っておきたいものだと思います。

他人が自分を馬鹿にすると云つて怒つていられるけれども、自分を自分で軽んじていては意味のわからぬことだと思ひます。時間励行なども、今少し皆が目覚めて、道徳に対する敏感が、責任ということと、真の自由ということと一緒に考える時が来なければ、いくら申し合せは出来ても駄目だと思ひます。

真実目覚めんとする私たちの光明団ですら、もう二年位前に入団していながら、葉書一本出さない人さえあります。もちろん私は団員から来る便りを以つて満足しようとも思わないし、団費などさえ出せないなら十年出さないでも出して下さいとは申しません。そもそも団則のない団体ですもの、一切の団員は団則なしに、ただ私たちの真実が、愛が、私たちを團結させる尊い清い団体なのです。けれど目覚めた人、目覚めんとする人は、眠つていられる人よりも責任に対して、そうです、強いつけられない責任に対して敏感であるべきだと思ひます。そうです、目覚めることそれ自身が、私たちの生命全体を、善悪に対して美醜に対して、正邪に対して、敏感にすることです。親しい懐かしい兄弟だと思つて訪れた時、「息子は三月ほど前に呉に行きました。光明ですか。そんなものが来ておるかも知れませんが。」何ということでしょうか、毎月毎月、手に豆を出して刷られ、不眠不休で、夜十二時一時と、努力の結晶で出来た光明が、何月も何月も読まれなくて塵にまみれているとは。ただで送る物なるが故に呉に行かうと、出ていようと葉書一枚送らずにいる。何ということでしょうか。こんな自分の損にさえならねば、人のことなんか考えなくてもよい人に（光明団に対してはそれでいい。免すも免さないもないけれど）目覚めるの、真実のと、問題があるのでしょうか。まだまだ夜明けの遠いこんな眠つた人が、うよりうよりと暮していることが、私に新しい涙を流さす種なのです。

私は終に言っておきます。人の偉大も、真実も、責任に対して敏感な、罪に対して、悪に対して、自然に対して、自己に対して敏感な人にも与えられることなのです。十七才の時、尋准の検定をとって、日浦東校に奉職し、十九才で正教員になった中村石雄君が四月の末、熱におかされ、肺炎脳膜炎と進んで不帰の客となった。中村君は今年二十才だった。私は四月十七日中村君に会って共に算術の研究をした。その日別れる時、私は「中村君、君は、かえって藤田里子様私の言わんとすることを聞いて下さい、そして人を救う手伝いをして下さい。」と言いました。けれど間もなく死んでしまわれたけれど、熱に浮かされた君は何を言ったか。

「天皇陛下に相済まぬ。国家に御奉公しないで死んでは皇太子殿下に相済まぬ」とそればかりだった。何という純な、何という真面目な考えだろうか。そして又しみじみ話したこともない私の名さえ度々口に出て、私に対する責任、まだ入団もしない君が私に対する責任さえ感じていられたそうであります。私が君を見た最初の第一印象は、頼み甲斐ある人、それでありました。君の日常は一切がこれ感心の至りであつた。「私がこんなに出来るのは信仰がさすのだ。」と言われたそうだ。ああ敏感よ！ 責任に対する敏感！ それが一切を解決する。

「霊の死んだ人形の生から脱したいと念じている兄弟のために、人形の世界に生き得ない人達のための真実の世界を創造して下さいませ。作って頂かねばなりません。」
(今来た手紙の一節)

人形なら感じはない。愛の世界、真実の世界、道德の世界、信仰の世界は、敏感な人の前にのみ、その扉が開かれる。

人形のように眠っておれ。何で真実の叫びが聞えよう。何で親の愛がわかろうぞ。何で努力が生まれようぞ。何で人生がわかろうぞ。(五月二十五日)